

大学における地域子育て支援

(3)子育て中の親と子を支える講座と箱庭療法

番匠明美

BANSHO Akemi

本稿は、本学における地域に根差した子育て支援の取り組みの中で、乳幼児期の子どもを育てる保護者支援の講座として希少な箱庭療法の体験に関して、これまでの実践経過を報告するものである。本学は2009年より地域との連携の中で子育て支援の活動に取り組み、現在西宮市及び神戸市における地域子育て支援拠点事業の一環として3カ所の子育て広場を運営している。広場で開催される講座は大学が乳幼児を育てる保護者に対して子育てに関する様々な視点や親子の関係を捉え直す機会を提供するもので、子育て支援の活動において重要なものである。その1つとして、本学では心理療法の一技法である箱庭療法を利用した講座を開催してきた。これまでの実践から箱庭療法体験講座は、乳幼児期の子どもを育てる母親らにとって①自身がどのように育ってきたかを振り返る。②自身の子育てを見直す(子どもの育ちを捉え直す)。③自身の人生を物語ることにより過去、現在、未来を結びつける。④今の自分をこれで良いと実感し受け止める。⑤これからの展望を持つ。などの心の作業に取り組む場となっていることが考えられた。今後も子育て中の親と子を支える取り組みを継続し、大学における地域子育て支援のあり方について検討していきたい。

キーワード：子どもの育ち、保護者支援、子育て支援、箱庭療法

1. はじめに

本学における子育て支援施設

本学では、西宮市の要請を受け、西宮市地域子育て支援拠点事業の一環として学内に子育て支援ルーム「しゅくたん広場」を2009年10月20日に、開室した。核家族化、少子化が進み、地域の結びつきが希薄になった現代社会では、子育てにおける様々な知恵や工夫の伝承が難しくなり、地域で“子育て”を支えるという意識も薄れつつある。そういったなかで、「人を育てる場」としての大学が子育て支援という立場から先進的であり尚且つ普遍的な視点を発信する意義は大きい。そのため、以前より地域に根ざした本学が子育て支援の取り組みを行うことには重要な意味があった。そう

した背景のなかで子育て支援ルーム「しゅくたん広場」はそこに集う人たちの交流をとおして親と子の育ちを多様な視点から考えることのできる「地域のたまり場」の役割を目指し開室されたのである。2013年度には短大のポーアイキャンパス(神戸市)への移転に伴い、しゅくたん広場は場所を夙川学院中高敷地内(西宮市神園町)の日本家屋一軒家の家政館一階に移転した。その結果附属幼稚園や夙川学院高校と隣接することにより、子育て支援の取り組みにおける異世代の交流がさらに密となった。

また西宮市における子育て支援広場の活動実績に基づき、神戸市においても地域子育て支援拠点事業として子育て広場「ぼかぼぼモトロク」(中央区元町六丁目商店街内)を2015年10月21日に開室した。本学の子育て支援広場が大学施設から町の中へ一歩踏み出

したかたちとなり、自治体・地元商店街・大学の3者が協力するなかで、地域において子育てを支える重要な拠点となっている。

2016年度には先の「しゅくたん広場」が附属幼稚園内保育室の一室へと2度目の移転を行っている。そして、2016年10月29日には「ぼかぼっぽモトロク」と同様の神戸市地域子育て支援拠点事業としてさらに子育て広場「のびのびにーの」(中央区二宮市場内)を開室した。

2016年12月末現在の各広場の利用数は以下の通りである。

「しゅくたん広場」
 家族登録数 1,572組 のべ利用者数 37,119名

「ぼかぼっぽモトロク」
 家族登録数 609組 のべ利用者数 9,418名

「のびのびにーの」
 家族登録数 81組 のべ利用者数 489名

利用者の傾向としてははりピーターが多く、子育てのなかでおこる日常的な不安を気軽に相談できる保育アドバイザー(保育士資格或は幼稚園免許を取得し子育て支援や保育経験のある本学卒業生)の存在は地域の親子に安心感を与えており、地域に根ざした子育て支援の場として、年を重ねるごとに広場が貴重な存在となってきた。以上本学が運営している3カ所にわたる子育て支援広場の変遷について少し長くなったが一度まとめておく意味でここで記した。本学の地域子育て支援の活動に関してはこれまでも研究報告(井上他2011、番匠他2012)を行ってきた。現在最初の開室より7年が経過し、また各広場はそれぞれ特色ある活動を行っており、その後の利用状況や講座内容の分析などに関してはまた別の機会に詳しく検討する予定である。本稿では本学における子育て支援のなかで保護者支援としての講座の位置づけとその取り組みとして希少な箱庭療法の体験講座に関してこれまでの実践から捉えられたものを報告する。

2. 親子を支える講座の位置づけと箱庭療法体験講座

(1) 講座のねらい

上述したように本学の歴史の流れのなかで、子育て支援広場も移転や地域の人たちとより近い距離にある

街中での開室により、少しずつ取り組みを変化させてきた。しかしながら、そのなかで変わらない基本は拠点事業として示されている以下の4つの内容である。

- ① 子育て親子の交流の場の提供と交流の促進
- ② 子育て等に関する相談、援助の実施
- ③ 地域の子育て関連情報の提供
- ④ 子育て及び子育て支援に関する講習等の実施

④にある講習等の実施を具体的な取り組みとしたのが子育て支援広場で開催される講座である。また講座の内容によっては①から③を網羅することもあり、講座は大学が行う子育て支援の取り組みにおいて重要な柱の1つと考えられる。

本学での子育て支援の取り組みの基盤となっているのは“母親(保護者)を元気にすることが子どもを健やかに育てていくことに繋がる”という考え方である(井上他2011)。この姿勢を具体化し継続して実践しているのが月毎に開かれる子育て支援広場が主催する定期講座である。利用者の希望や保育アドバイザーの現場の感触を基に毎年少しずつ内容は変更している。本学の教員、保育アドバイザー、行政や地域の人たちの協力を得て講師を編成し、体験形式と講義形式、また親中心タイプと親子参加タイプなど内容、形態ともにバラエティーに富んだ工夫を凝らしたものとなっている。これらの講座が生き生きとしたエネルギーを得ることの出来るものになるかどうかは、講座をあたたく見守る保育アドバイザーらの力が大きく影響するところでもある。



2009年に短大敷地内に開室された「しゅくたん広場」

講座の中である母親は自分と離れても子どもが泣かないことをとても気にしておられた。「この子は自分が

いなくても良い感じがする」「私のことが好きではないかもしれない」といった話を繰り返しておられた。しかし、子どもはちゃんと遊びの途中で母親を確認しており、子どもの方から母親にくっついていく様子も見受けられた。母親が何か子どもの気持ちをしっかりと受け止めかねている感じが感じられたため、子どもは遊びながらお母さんをちゃんと見て、確認できると安心して遊んでいることを伝えた。また、その場で母親の背中にもたれかかって嬉しそうにしている子どものそのタイミングを捉え、「お母さんとくっついた一で嬉しいなあ」と筆者が言うと子どもは笑いながら何度も母親にくっついたを繰り返し、母親も「くっついた一、くっついた一」と子どもが母親を求めて安心し、喜んでいるという実感を持ちながら子どもと関わっている様子が捉えられた。母親の悩みを母子の実際のやりとりの中で、取り上げ理解を促すことでその後の母子のかかわりを変容させていくことが可能となる。これは、親子で利用する子育て支援広場であるからこそできる相談の事例である。



開室当時の「しゅくたん広場」の様子

子育てをする中で他者との比較に悩んだり、マニュアルを求めてテキスト本に頼りすぎる結果、目の前に居る自分の子どもの姿が見えなくなってしまうことなどは親として成長していく過程で誰もが小なり大なり出くわす問題である。“正しい子育て”ではなく、“私の子育て”を工夫できる人をめざして支えていく働きかけが重要である。

① 親が自ら考える力を育み、心と体で感じるものを

大切にしながら自分の子育てに自信が持てるようにする。

② (母)親の人としての育ちを考えるために新しい“窓(視点)”を提供する。

③ 孤立した子育てに落ち込まないように、自分らしさを認め合える仲間作りの機会を提供する。

これらの3点(井上他 2011)を主なねらいとして本学では子育て支援広場における講座を企画してきた。本稿ではさらに次のねらいを加えることとする。

④ 親子の関係が豊かに変容できる場を提供する。

次に「しゅくたん広場」(以下、「広場」と表記する)が2014年度から2016年度に実施した定期講座内容を参考例として挙げておく。

[2014年度定期講座]

4月<みんなであそぼう！>：紙皿シアター等

5月<パパ・ママと一緒にヨガ>

：親子でヨガを楽しむ

6月<みんなで楽しくおはなし会>

：絵本の読み聞かせ等

7月<あかちゃんとふれあい遊び>

：ベビータッチを体験

7月<0歳からの「お口」のこと>

：歯医者によるお話

8月<クレパスとスタンプでオリジナルバックを作りましょう！>：トートバック制作

9月<食物アレルギーと離乳食>食育講座

：栄養士によるお話

9月<ママもおしゃれしましょう>

：ママによる講座 プレスレット制作

10月<祝5周年 しゅくたん広場 お楽しみ会>

：お買い物遊び等

11月<お外であそぼう！>：付属幼稚園園庭にて

11月<かんたんリトミック&ふれあいあそび>

11月<クリスマスリース作り>

：季節行事に関する制作

12月<お姉さんと一緒にあそぼう>

：高校生によるパネルシアター

1月<心理学シリーズ①>

：心理学実習・卵型色彩法の体験

2月<心理学シリーズ②>

：心理実習・粘土遊び

3月<心理学シリーズ③>

: 心理実習・実習の振り返りとお話会

2014年度は、設定された講座に参加するだけではなく、利用者である親がより積極的に各自の特技を活かして講師となり広場で講座を主催する支援 「ママ企画講座」(4回)や連続講座を始めた。

[2015年度定期講座]

4月<親子でふれあい遊び>: 親子で手遊び等

5月<みんなで楽しくお話会>

: パネルシアター等と絵本の読み聞かせについて

6月<おもちゃを作って遊ぼう>: 廃材で玩具制作

7月<金魚すくいごっこ>: 制作した金魚で遊ぶ

8月<安心!安全!おいしくパクパク食べて!>

: 簡単だしの作り方と食育

9月<風車を作って遊びましょう>

: 季節の玩具制作

10月<ハロウィンがやってきた>

: 変身マントとアルバム作り

11月<クリスマスリース作り>

: 季節行事に関する制作

11月<心理学シリーズ①>

: 心理学実習・卵型色彩法の体験

12月<心理学シリーズ②>

: 心理学実習・粘土で自分を表現

12月<お祝い箸を作って新年を迎える準備をしよう>

: 季節行事に関する制作

1月<心理学シリーズ③>

: 心理学実習①②の振り返り及び相談会

2月<モンテッソーリの子どもの発見から学ぶ>

: モンテッソーリの考えから子育てを考える

3月<おでかけごっこあそび>

: ごっこ遊びを楽しむ

2015年度には次世代教育と世代間交流、家族支援等の目的で不定期の講座を増設している。

- ・ 本学大学生による絵本の読み聞かせ等(年6回)
- ・ 付属幼稚園共催のおあそび会(年6回)
- ・ 祖父母世代との交流をはかる講座
「おじいちゃん、おばあちゃんDAY」(年3回)
- ・ 父親を対象とした家族で楽しめる講座
「パパ講座」(年3回)
- ・ ママ企画講座 (年4回)



家政館に移転した「広場」



家政館の「広場」の部屋

[2016年度定期講座]

4月<ようこそしゅくたんひろばへ>: ふれあい遊び

5月<みんなで楽しくおはなし会>

: パネルシアターと親子で制作等

6月<小児歯科について>: 歯科医によるお話

7月<すこやか親子体操>

: 親子でできる楽しい体操を体験

(8月 付属幼稚園内改修のため閉室)

9月<離乳食から幼児食へ〜味覚は3歳までに形成される〜>: 栄養士によるお話

- 10月<ハロウィンがやってきた>
- 11月<クリスマスリース作り>
- 12月<お話ししましょう～トイレトレーニング・お母さんとお子さんの良い距離感～>子育て相談とお話
- 1月<心理学シリーズ①>
心理学実習・卵型色彩法の体験
- 2月<心理学シリーズ②>
心理学実習・粘土で自分を表現
- 3月<心理学シリーズ③>
心理学実習①②の振り返り及び相談会
- 3月<親子英語>：親子で英語を楽しむ



付属幼稚園の森の小道を下ると「広場」がある



付属幼稚園内に移転した「広場」

2016年度の不定期講座は保育アドバイザーによる季節の行事を取り入れたものや、パパ講座とおじいちゃん、おばあちゃん DAY の開催(年6回)、ママ企画講座ではアロマを取り上げたもの等が年3回行われた。

その他、希望者に予約制で箱庭療法体験講座を受講できるようにしている。箱庭療法は筆者が知る限りでは子育て支援広場でこれまでに行われている例はなく、こういった機会を設けることは、子どもや子育てといった事柄に没頭し社会から切り離されたような孤立感に陥りがちな時期に、広場利用者(母親)のなかに眠っている主体的で多様に生きようとする柔軟な力を支えていくことが出来るのではないかと考えている。

(2)箱庭療法体験講座の実際

2010年「広場」開室2年目に大学の特色ある試みとして取り組んだのが箱庭療法体験講座である。箱庭療法では心の中に浮かんだイメージをさまざまなミニチュア玩具を使用して、それらを砂箱の中に自由に置いていくことで、制作者の内的世界が表現されると言われている。この療法は心理療法の一技法で、筆者(臨床心理士)が担当して行った。当初のこの実践に関しては研究報告(番匠他 2012)で紹介し、子育て支援広場においてこの取り組みを行うねらいについて述べた。これまでに2010年度 3回、2011年度 7回、2012年度 4回、2013年度 2回、2014年度 3回、2015年度 1回、2016年度(12月末現在) 10回 行い、7年間で合計30回実施している。これまでの希望者はすべて母親である。

「広場」の2度の移転により、体験の方法も変化してきた。学内に「広場」を設置していた時期には同じく学内にあった学生相談室で実施している(2012年度まで)。これは元々この取り組みが学生相談室の地域貢献の視点を取り入れたものでもあり、「広場」と共催して行ってきたからである。そして2013年度に夙川学院高校敷地内の一軒家(家政館)に「広場」が移転後は同じ一階部分の廊下を隔てた小部屋で実施することとなった。2016年度付属幼稚園内に2度目の移転後は広場内にあるガラス戸一枚を隔てたスペースで行っている。学生相談室で実施していた時には「広場」との距離がかなりあり、完全な母子分離の状態で行うことが出来た。その当時箱庭療法を体験したある母親はこのとき

出産後はじめて子どもと離れる時間を持ち、子育てに没頭していた自分を振り返り「自分自身について考える」ということを思い出した」と感慨深げに感想を述べられた。現在はガラス戸を一枚挟む距離感により、以前のように箱庭体験者が子どもから離れ自分だけの空間や時間を感じることは出来ないが、母子の間に緩やかな分離が生まれ、お互いに少し離れても楽しい体験が出来るという実感を持つ機会が生じることとなった。子どもにとっては親が見える距離で少し離れて安心できる場所である遊びに熱中するという母子分離にむけてのプラスの効果が生じていることは、興味深い。

またこの体験講座を実施する際には、「広場」主任の教員や保育アドバイザーが母親と離れる子どもの見守りを担当してきた。利用者親子とスタッフとの安定した関係性が背景にあり、この体験講座は支えられてきたのである。

(3)箱庭療法体験講座の作品例

ここでは箱庭療法体験講座で制作された5つの箱庭作品を紹介する。



箱庭1

箱庭1：はじめから大胆に箱の中で砂を動かし、向こう側に海を作り、魚やウミガメやカラフルなガラス片を置いていく。その左上にはこちらを見ている人魚がいる。右手前は人の住む町で、左手前に試行錯誤して馬の家族を置く。制作者である母親からは水辺がほっとできて好きなのでつくったことと、自分の家族を馬で表現したとの説明があった。箱庭に表現されたも

のの中で筆者がとても印象深く感じた“人魚”について質問すると少し考えてから、馬の家族も自分のことだが、人魚も自分とのことであった。馬の家族と人魚は海を挟んで見つめ合っているようにも見える。右むこうの海からアザラシやウミガメが手前の人の世界、家族の世界(現実的な生活の領域)に上がってきているのが印象的で、何か新たなものをもたらされるような動きを感じる表現であった。

箱庭2：川沿いの公園の風景。散歩する家族や休憩している様子を表現したとのこと。左向こうと右手前に砂を分けてななめに川を作る。川で仕切られた2つの領域はよく似た表現になっている。川沿いの見通しの良い公園とその奥に広がっている柵で仕切られた森は、よくわかっている現実の日常生活と目には見えないよくわからない心の中の世界とも感じられた。また制作者の話を聞きながら、2つの領域はお互いに大切な2人のそれぞれの世界という連想が筆者の中に生じた。2本の橋でしっかりと結びつけられているのが印象的である。最後に川の中に鳥と透明なおはじきを置いている。これについては「動物と光るものが足りないと感じたので」と説明された。箱庭にはすでに飼犬が3匹使われているので、この鳥にはもっと自由に飛び回るといった野性的なイメージが象徴されているのかもしれない。真面目できちんとした印象を受ける制作者の、内に秘めた或はこれから獲得していく新たな側面を見せられたように感じた。



箱庭2

箱庭3：左手前は水辺、右手前は人が住んでいる風車のある町、森では動物と人が共存しており、ひなが育ち卵が孵ろうとしている。たえず砂を触りながら、色合いを工夫し、感覚的なおもしろさも楽しみながら制作していた。色彩豊かで音と風を感じることでできる世界となっている。右上の深い森の中で生まれ、静かに育っていく可能性が、実際の子どもの育ちを連想させると同時に、この母親の中で着実に積み重ねられていく女性としての力とも考えられた。左上のトンネルから走りでる列車の表現からは、この箱庭の世界に停まらず、次のステージに進んでいこうとする制作者の前向きな姿が感じられた。



箱庭3

箱庭4：中心に砂を寄せて山にし、向こう側と手前に2つの水辺を作る。獰猛な動物はどう置いたら良いかわからなくなったので、優しい動物ばかりにしたとのこと。動物たちは夢の世界の中にいる家族を表している。手前のお父さんは子どもを肩車しており、もしびったりくる人形があれば父子の横のいすにお母さんを置きたかったと説明された。動物のいる広い世界と家の中という閉じた空間、夢の世界と現実の家族、山に隔たれた2つの領域。手前からトンネルをとり抜けて、こちらから向こうの世界へ走って行く電車や、全体を見渡しているように箱の左奥の木の横に置かれたクジャクが緩やかに異なる世界を繋げているように感じた。箱庭を見ながら「このごろ今の私で良いのかなと思う」と感想を述べられた。子育てをしながらこれからどう過ごしていくのかなと、何となく日頃漠然と

感じていた思いが、箱庭の中に表現され、言葉となって意識化されたようである。



箱庭4



箱庭5

箱庭5：箱中央に池を堀り、カモの親子を置く。橋を子どもが渡ろうとしている。池の周りにはゆったりと柵で囲い、右上と左下には森が広がっている。男女が椅子に座り虹を眺めている。おじいさんとおばあさんが並んでいるが、歩いていくようでもあり、これまでの道のりを2人で眺めているようでもある。全体を見渡し、思いにふけるような女の子が右下の木陰に座っている。橋や虹からは次にどんな世界に渡っていくのか、2つのベンチにはこれからどんな人が現れ座るのか、

ゆったりと時間が流れるような表現の一方で今後の変化が示唆されているような楽しみな印象を受ける。

箱庭の自分の作品を筆者と共に見ることから、母親自身の内省だけでなく、子どもの育ちを捉え直すような視点に気がつかれる場合もある。

ある事例では箱庭の制作後、作品を見ながらその母親の子どもで兄弟のうち兄についての話となった。初めは、箱庭の作品を見ながら母親自身の性格に注目した内容が語られていたのだが、次第にお兄ちゃんにはつきつく厳しくあたってしまうこと、そしてその上の子は自分と良く似ていることに気づいていかれた。母親自身の自分で受け入れられない部分を上の子どもを通して気づかされるために、腹が立ってしまうのかもしれないと語りながら、「そう思うとお兄ちゃんがいとおしく思えてきますね」としみじみと話された。後日その母親とたまたま広場で出会い、お兄ちゃんをしゃかりそうになった時、ちょっとひと呼吸おけるようになったこと、お兄ちゃんが母親に甘えてくるようになったことなど親子の関係の変化が報告された。

3. 保護者にとって箱庭療法体験を行う意味

箱庭を制作する時には、母親が自分の作りたい表現に気持ちをだんだんと集中していく様子が伺われる。箱庭療法体験の日は多くの場合子どもと一緒に来室し、しばらく母子で遊んだ後頃合いを見て、子どもと離れ、隣の箱庭のスペースに母親だけが移動し制作することになっている。子どもは通い慣れた「広場」と保育アドバイザーに安心感があり意外と落ち着いて遊び続けていることが多い。一方で母親は初めは子どもを気遣いつつも次第に自分の作業に熱中していく。前述の〔箱庭1〕では、砂箱の向こうの遠いところにおかれたファンタジーの世界にいる人魚が表す私と、馬という動物の世界で表された家族の中の(母親としての)私が、海を挟んで向き合っており、両者がこれから人の世界でどのように統合された私となっていくのかが興味深い表現であった。制作している過程の中で「母親である私」と「母親でもある“私”」のあいだを行きつ戻りつしながら自分らしい世界を作り上げていくという気持ちの動きが起こっているように思われる。

様々な箱庭の玩具の中から、より自分の気持ちにぴったりくるものを選択し、テキストのないところで迷いつつ自分の世界を作り、出来上がったものを筆者とともに受け止めていく。1時間程度の短い間に行われ

る作業であるが、この時間と場を体験することをとおして、制作者が自分の感じることに對して信頼感を持ち、正解のないプロセスに向き合っていく姿勢を得て、自分らしい子育てをしていくときにその芯となるようなものを見つけることができると考えている。

前回の研究報告(番匠他、2012)以降、2016年度までに実践した30事例からの考察ではあるが、見守る者(筆者)と共に箱庭の中に表現された世界を味わうことをとおして、箱庭療法を体験する母親は、

- ①自身がどのように育ってきたかを振り返る。
- ②自身の子育てを見直す(子どもの育ちを捉え直す)。
- ③自身の人生を物語ることにより過去、現在、未来を結びつける。
- ④今の自分をそのままの私として実感し受け止める。
- ⑤これからの展望を考えてみる。

などの心の作業に取り組むことができるのではないかと考えている。

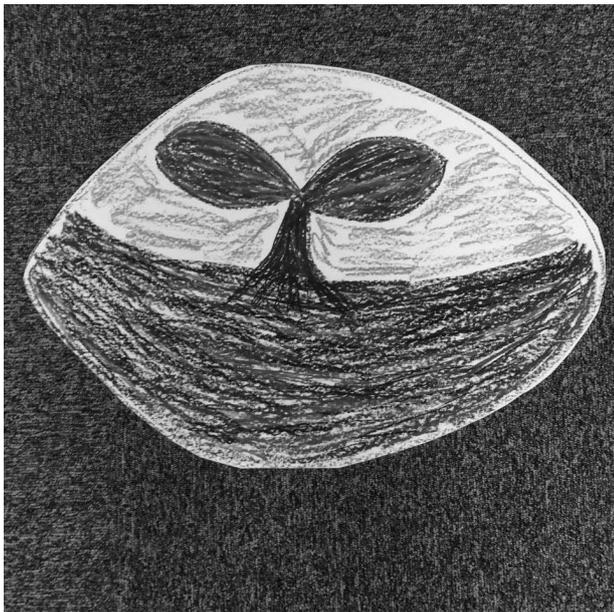
4. 今後の課題

箱庭療法体験講座の事例を今後も積み重ねていくことにより、子育て支援広場における箱庭表現の特徴を捉え、箱庭療法の実践領域を広げて、心理治療の場以外でのこの療法の利用方法を検討していきたい。

また、卵型色彩法や粘土などを使用してイメージを形にするといった表現療法を取り入れ、「広場」の利用者でグループを作り、その同じメンバーによる継続した心理学講座も開催している。

卵型色彩法は“卵”に対して我々が連想する料理の材料といった身近な印象からくる日常性や新しい命が誕生する可能性等のイメージを利用し、卵型に切り取った画用紙の中に“私”を表現するものである。出来上がった作品を見ることで、自分自身を客観的に捉え直す心の作業が始まる。卵型色彩法は平面での活動であるが、次に行う粘土遊びでは立体的な表現ができる。そこでも“私”の表現を行うわけであるが、粘土を捏ねたり、ちぎったり、叩き付けたりという過程で、より心身を含めた“私”の全体性を実感できる実習になる。粘土遊びの実習の途中では、他者の作品に自分が想像したものを付け加えたり、また、他者から手を加えられた自分の作品をどのように受け止めるか等、制作したものを通してグループのメンバーと思いを共有するといった体験も行う。筆者もファシリテーターとしてグループに参加している。参加者のある母親は自

分の作品について説明する中で「今は生活が子育てばかりになってしまい自分はこのままでよいのかという焦りがあって、子ども第一に考えられないダメな母親とも思ってしまう落ち込むときがある」と日頃抱えていた思いを語られた。それに対して他の参加者からでた子育てに対する考え方を聞くことを通して、“良い母親”になろうとがんばりすぎなくて大丈夫との実感を持つことができたようであった。



心理学シリーズ①：卵型色彩法の作品例



心理学シリーズ②：粘土遊びの作品例

参加者は自分自身の感情や考えにより深く向き合いながら、メンバーとの交流を経験していく。そこでは、ひとりひとりが様々な思いを抱えて参加しており、どのような“私”であれ、そこに集まったグループのメンバーから受け止めてもらえるという安心感を感じられる。その経験がそれぞれの子育てと親の育ちを支えることに繋がると考えている。このような他者とのつながりと自身の心の深まりをしっかりと統合できる場の提供を今後も検討していきたい。

親自身が“自分がどう感じ、どう思い、どう考えるのか”を大事にできる態度を身につけることが、子どもを元気にできる子育てには必要である。そういった態度を生活のなかで子どもに伝えることが出来れば、ひとりひとりがそれぞれの主体性を大切に育てていくことが出来るのではないだろうか。利用者親子がそれぞれの内的世界を大切にしながら、この社会においてどうすれば安心感を持って育てていくことができるのか。このテーマを検討しながら大学における特色ある子育て支援の取り組みを今後も提供していきたいと考えている。

文献

- 1) 番匠明美 2007 「保育者養成コースにおける“表現する”活動の試み」 創元社『心理臨床における個と集団 京大心理臨床シリーズ5』pp280~290
- 2) 番匠明美 2008 「保育者養成コースにおける“表現する”活動の試みⅡ」 甲南心理臨床学会紀要 第10号 pp35~43
- 3) 番匠明美 2010 「保育者養成コースにおける“表現する”活動の試みⅢ 箱庭療法体験の実践例より」 夙川学院短期大学 教育実践研究紀要 第2号 pp64~71
- 4) 井上千晶・番匠明美・三木麻子 2011 「大学における地域子育て支援—しゅくたん広場での実践」 夙川学院短期大学 教育実践研究紀要 第3号 pp17~24
- 5) 番匠明美・井上千晶 2012 大学における地域子育て支援 (2)しゅくたん広場での日曜講座・箱庭療法体験講座に関する実践報告 夙川学院短期大学 教育実践研究紀要 第4号 pp17~21
- 6) 名須川知子・上月素子・井上千晶・番匠明美他 2015 「世代間交流としてみな子育て支援に関する研究—祖

父母世代の意識調査から一」 兵庫教育大学研究紀
要 第47巻 pp11~18

<付記>箱庭療法体験講座を開催するにあたり、子ども
たちの見守りを担当していただきました井上千晶
先生、新山友里先生をはじめとする保育アドバイザー
の先生方に心より感謝申し上げます。

ピアスーパーバイザーからのコメント

社会的分断が拡がり、自己責任論があらゆる領域で
強調される中、子育てにおいても不安や孤立感を抱く
親がいる。そのような親に対して、本論文で紹介・分
析されている地域子育て支援（箱庭療法体験講座）は
親自身が自らをふり返り、向き合う貴重な居場所とな
っている。また幼児理解の理論や方法、カウンセリング
を含む教育相談を学ぶ上で多くの知見を提供してい
る。今後より多くの事例を収集し、利用者親子間のつ
ながりを育む取り組みも含めてより一層発展していく
と考える。

(担当：齋藤 尚志)